

とある山間の薄暗い村

昼は薄い霧が立ち込み太陽の光が入らず、夜は深い森に阻まれ月明りも満足に当たらない。

そんな陰気な土地に、あるうわさがあった。

「人食い」

道行く人や村人が殺され、体を食べられてしまうというのだ。

人食いの姿を見た者はいない。なにせ死体ばかりで生き残った者がいないのだから。

しかし、その土地に住む者は古くから伝わる童話になぞらえてこう口にした。

「人食い狼に気を付けろ」

しばらくの間、人食いに殺される村人はいなかったが、ある寒い夜に村へ向かう街道で男の悲鳴が響きわたる。

車輪が外れ、馬も逃げ出した馬車が一台、冷たくなった死体が一体。

その横に少女と呼べる若い女が一人、たたずんでいた…。

少女と狩人—そして怪物は喰う—

月明かりしかない夜、暗闇が広がる街道を慎重に進む。

背の高い木が両脇にそびえる道で月が照らしてくれる場所は少ない。顔を横に向ければ吸い込まれそうな漆黒が木々の間を塗りつぶしている。

俺の名はユージン、狩人であり猟師。自分の生まれた村で獣を狩る仕事をしている。

視界のきかないこの時間に狩りをしに来たわけじゃない。

俺はある匂いを嗅ぎつけそこに向かっている。

血の匂い、冷たい風に乗ってくるその匂いに俺の嗅覚が反応している。

俺にはわかる。自分の過去と同じ匂い。

あの時もこんな夜だった。両親を失った夜も。

道の外れに馬車がみえる。車輪がひしゃげ、積んでいた荷が散乱していた。

馬車の前に何かがある。濃密な血の匂いは間違いなくそこから漂っていた。

人としての形はほとんど保っていない。顔とはらわたが食い尽くされた死体があった。

ヤツだ、人食いにやられた跡だ。

今まで人食いに襲われた村人、そして俺の両親と同じ残酷な殺し方。

俺は彼らの仇討ちをするために生きている。人間をこんな形にする化物を許せない。

ふと馬車の影を見ると、何か動く気配がある。

誰かいる。血と獣の匂いで気付かなかったが人だ。

「驚いたな…、ヤツに襲われて生きてる人間は初めてだ」

物影に縮こまるその人は、よく見ると少女だ。もとは白かったであろうワンピースに血

がべっとりとついている。

金色の髪をしたその子は、こちらを見つめたまま黙っている。

「もう心配ない。怖かったよな、さぁおいで」

そう手を差し伸べるとおずおずとこちらに近づく。

怪我はなさそうだしとにかく村に連れて行こう。こんな場所では安心できない。

少女の手を引くが、腰が抜けているのか立ち上がらない。

膝の下に手を入れ抱き抱えて馬まで連れて行く。

村までは大した距離じゃないが、薄暗い木々の間から奴が出てきてもおかしくない。自然と体が緊張する。

胸に抱いた少女は血まみれではあるが傷はないようだ。しかし小さな体は震えている。当然だ、目の前で父親があんな姿にされてしまったのだから。

脳裏に3年前の記憶が蘇る。両親が人食いに襲われたとき初めて見つけたのは俺だった。

今でも血と生臭い獣の匂いは鮮明に思い出せる。いつか奴をこの手で倒すその時まで、この記憶は忘れることはできないだろう。

昔を思い出しているうちに村の明かりが見えてきた。

1年のほとんどを霧が覆う山間の村「アネモネ」。俺の大切な故郷。

馬から降り、手近な場所に繋ぐ。

「大丈夫か？歩けるか？」

少女は問いかけに答えることもできないくらい震えている。俺の体に少しばかり寄りかかってやっと立てるといふありさまだ。

「まずは休ませてやらないとな…。俺の家へ行こう」

村の入口に一番近い粗末な小屋へ向かう。アネモネは比較的大きな村長の家を中心に、家がポツポツとあるだけの小さな村だ。誰かが夜に馬をいななかせればすぐに分かる。

俺の家の前にはおさげを肩に乗せた女の子が立っていた。

「アイナ、何してるんだ」

「何してんのはこっちのセリフよ！街道の方で悲鳴が聞こえた、ってんで男たちが集まっているのに、アンタまた一人で飛び出してっただの！？」

コイツは幼馴染のアイナ。赤みがかった茶色の長髪を乱暴にまとめて片方の肩に垂らしている。普段は畑仕事を手伝っているせいで手も顔も泥がついているのが当たり前だが、年頃の娘らしく小奇麗にするときもあるらしい。花柄のワンピースにオレンジのコサージュを頭につけている。

まあ、村で数少ない若い女の一人でそこそこ可愛い顔をしていると思うが、子供の頃から世話焼き根性が強く、こうして勝手に心配してはプリプリと怒っている。

「ガミガミいうのは後だ、この子を頼む。俺のベッドを使っていいから休ませてやってくれ」

「ちょっと！どうしたのよこの子、血まみれじゃない！手当しなきゃ！！」

「よく見ろ。返り血だけで怪我はない。けど目の前で父親が人食いに襲われたせいでひどく怯えている。湯を沸かして体を洗って…、服はお袋のがどこかにあるから、適当に着せてやってくれ」

「わかったけど…、アンタはどうするの？」

「村長に報告して男手を集めてくる。奴がこっちにも来るかもしれないからな。オマエも何かあったら大声出して俺を呼んでくれ」

「アンタがきて…、どうしてくれるのよ？」

「守ってやる。村で一番の猟師は俺だぞ？まあ奴をぶっ殺すついでにな」

「……ユージン、おじさまとおばさまのことは悲しかったけど無茶は…」

気の強い幼馴染が少し控えめな言葉使いになる。俺は目を吊り上げたアイナと言いかうのは日常だがこういう時は苦手だ。

「とにかく頼んだ！」

自分でもぶっきらぼうに思う逃げ方で、村の中心地へと走り出す。背中にはアイナの声がいくつかぶつかった。

小走りに村で一番大きな家の前に立つ。アネモネの村長の家だ。

家の前にはすでに何人かの男衆と、一際目立つ恰幅のいい男がいた。

「フヒュー、フヒュー！ユージン！探していたぞ」

お世辞にもかっこいいとは言えない呼吸をしているのが村長だ。外は寒いくらいなのに、額に脂汗をかき、突き出た腹は膨らんだり凹んだりを繰り返している。

村長はこんな見た目だが、山間の何もない村を飢え死にさせずに長年治めてきた優秀な村長だ。村人たちは村に何かあったときは自然と村長のところに集まる。

「村長、人食いが出た。村に来る途中の馬車が襲われて一人食われた」

息を飲んで緊張する周りの男衆だが、村長は冷静に、たっぶりある下あごに手を当てて真剣な顔をしている。

「そうか…3年前のように…。なんてことだ…。」

「親子が襲われて娘の方は助かった。今俺の家でアイラが看てる」

「なんと！人食いに襲われて助かったのか！！なんとというか…不幸中の幸いだな」

「男の、父親の大きな声が聞こえたからな。俺もそれで気づいたんだ」

「娘さんだけでも助かったのは喜ばしい。ユージンもよくやってくれた。しかしー」

村長はフヒューと息を吐き出してから、

「両親のことはよくわかるが一人で先走ってはならん。若いのが死に急ぐようなものだ」

「わかってるよ。でもヤツをやるのは俺さ」

村長の悲しむような、呆れたような表情を横目に報告を終えて自宅へ戻った。

戸を開けて入ると、大きなたらいにお湯が沸かされていた。

アイナが用意してくれたんだろう。部屋をもうもうと湯気が立ち込めている。

「ユージン！良かった、戻ってきたわね」

奥からアイナが出てきた。何やら困った顔をしている。

「何だ、何かあったか？」

「あったもなにも、あたしじゃダメって言うのよ」

「ダメって、なにが？」

「着替えよ！血がべったりなのに、服を脱いでくれないから綺麗にもできないわ」

アイナが俺の胸にぐっと白い布地を押し付けてくる。

「おい…、まさか俺がやるのか？」

「しょーがないでしょ、あたしがダメならあんたしかいないし」

参った。それを任せたくてこいつに押し付けたっていうのに…。

「…あんたまさかあの子をやらしい目で見てるんじゃないんでしょうね」

アイナの目が細められてドスの効いた声で聞いてくる。

「まだ小さな子でしょ！村の子どもをお世話するのと一緒に！！もしもやましい事したら怒るわよ」

「やましいことなんて考えてないって！分かったよ、俺がやるから。あの子に着せる服はあるか？」

当然でしょ、と投げつけられた服とたらいを少女のもとへ持っていく。

少女の前におっかなびっくり近づく。俺に対して怯えている様子はないが、刺激しないようゆっくり視線を合わせる。

「俺はユージン。さっきのお姉さんはアイナって言うんだ。君の名前は？」

少女の唇は少し開き、すぐに閉じるということを繰り返したが、少しすると

「ティア…」

そう小さく教えてくれた。

「よしティア。辛いことがあったがここは安全だし村の皆は優しくて親切だ。安心していい」

布巾をお湯に浸して彼女の横に座る。

ティアは逃げるでもなく、俺の顔をじっと見つめている。

「どうしたものか…」

手にある布巾を見て俺も固まってしまう。アイナの言ったとおり相手は子どもだ、子ども。

「ひとまず身体を拭いてやらないとな」